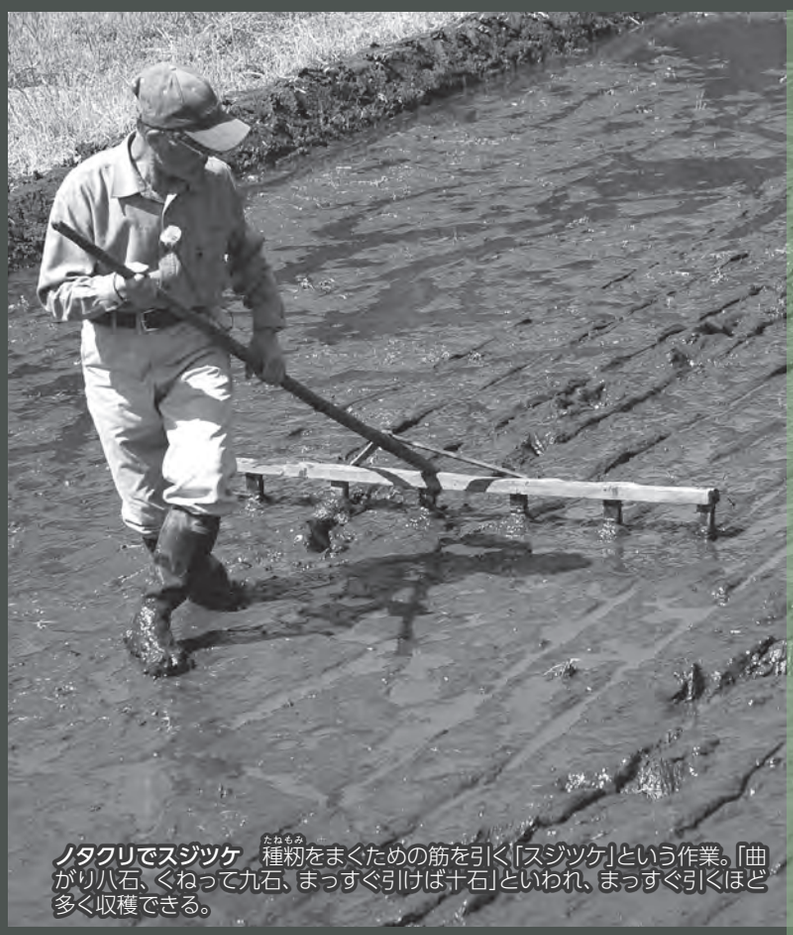
語り継ぐ、上尾の摘田（つみた）

3月2日、上尾の摘田・畑作用具が文化財としての高い価値が認められ、保存・活用のため国登録有形民俗文化財に登録されました。

今では使われることのないこれらの農具は、どのように使われていたのでしょうか。上尾の先人たちの暮らしぶりや、その苦労・工夫に迫ります。



ノタクリでスジツケ　種籾（たねもみ）をまくための筋を引く「スジツケ」という作業。「曲がり八石、くねって九石、まっすぐ引けば十石」といわれ、まっすぐ引くほど多く収穫できる。

マンノウで田作り　田の土を掘って塊を砕き、平らにならして種籾をまくことができるようにする。

ハイブルイで種作り　田摘みする種籾を灰でくるむ際に水を掛け、大きな灰を除去するために使う。

田植えをしない稲作「摘田」

そもそも摘田とは何かご存じでしょうか。稲の栽培法として、一般的には苗を作り田植えをする「植田」がよく知られていますが、「摘田」は種籾（たねもみ）（稲の種子）を直接田にまく栽培の稲作です。作業に合わせて、さまざまな農具を使用します。

摘田は関東地方の大宮台地、武蔵野台地、相模野台地、三重県鈴鹿地方、南九州地方など、全国的に行われてきました。中でも上尾市域を含む大宮台地では昭和30～40年代の遅い時期まで盛んに行われてきました。

当時の上尾市域では農業が主産業で、農地の約8割が主に麦やサツマイモを栽培する畑作地帯でした。農地の2割ほどを占めていた田では、古くから稲作が行われていましたが、そのほとんど全てが摘田でした。終戦直後まで、市内には田植えを知らない農家がいるほど、摘田が浸透していたのです。

摘田は上尾の土地柄に合っていた

ここまで摘田が浸透していた理由は、上尾市域の土地や水などの環境が、摘田に適していたためです。

上尾市域では、畑は大宮台地上に、田は谷の底部に当たる低湿地にありました。これは、上尾が大宮台地上にある土地柄、用水路を作って台地の上まで水を引き上げることが困難だったためです。そのため、田植えをする際に必要になる水を確保するために、雨水や湧き出す水を利用できる低湿地で稲作を行っていました。低湿地は地中の温度が低く、苗を田植えする植田では稲が成長しづらい環境でした。

また、上尾市域が畑作中心の農業地域であったことも理由の一つです。農業経営を支えるのは麦などの畑作物でした。麦が収穫される5月下旬～6月にかけての時期は、農家にとって最大の繁忙期です。植田による稲作ではこの時期が田植えの時期に当たり、作業が集中してしまいます。一方、摘田の場合は5月上旬に種籾をまく作業を行うため、麦の収穫と稲作の労働時期を分散させることができました。

摘田の歴史の終焉（しゅうえん）

昭和20年代末～30年代には、摘田は

語り継がれる摘田の記憶

市制作DVD『上尾の摘田～直播による伝統的な稲作の記録～』に出演した大木一夫さん(兄・左)と智裕さん兄弟

一夫さん　我が家でも摘田を行っていました。田んぼごとに水の深さが全く違い、深いところではひざ上まで足が沈むところもありましたね。摘田は今の稲作とは異なり、11月頃の霜が降るような寒い季節が収穫時期でした。田下駄(深田で稲刈時に足が埋まらないように用いた民具)を履いたり、雨が降ったときはゴザを合羽代わりに着ていたりしたことを思い出します。

智裕さん　自分はまだ幼かったので、直接田んぼに入って作業することはほとんどありませんでしたが、母が一斗五升ザルを身に着けて田摘みをしていたことは記憶しています。また「田コスリ」(田の表面をならして平らにする作業)など、幼いながらも自分にできる仕事を任されて、手伝いをしていました。「田井戸」(摘田に使用する水を確保するため掘られた池)では、ドジョウやタニシなどを採って、よく遊びました。

一夫さん　今回登録された道具を見ると懐かしいですね。日常的に使ってきた道具が、国登録有形民俗文化財になるというのは不思議な気持ちです。水・天気・土地に合わせて、本当にいろいろな道具を使っていたなとしみじみ思います。

田にまいた種籾

一斗五升ザルで田摘み　種籾をまく「田摘み」で必ず使う一斗五升ザルは、左手で抱えるようにザルを持ち、右手の主に親指・人差し指・中指の3本の指で種籾を摘まみ、ノタクリでつけた筋の中に、軽く投げ落とすようにして行う。

田舟で稲刈り　摘田では、稲に湿った泥が付くのを防ぐため、鎌で刈った稲を束ねて田舟に乗せる。

急速に行われなくなり、昭和40年代後半にはほぼ消滅しました。代わりに導入されたのは植田による稲作です。

この背景には土地改良・農業技術の進歩などにより、田に井戸を掘り、品種改良された稲を井戸水で栽培することが可能になったことなどがあります。また、時代と共に需要が少なくなった麦の栽培が減少し、麦の収穫で忙しかった5月下旬～6月にかけて田植えをすることが可能になったことなども理由の一つです。

さらに首都圏の50キロメートル圏内に位置するため土地の利用価値が高まり、農業以外の付加価値が出てきたことも摘田の終焉に拍車をかけました。市内に広がっていた田畑は真っ先に土地開発の標的となり、上尾は都市化が進みました。

国の宝になった上尾の摘田・畑作用具

今回登録された農具は、昭和40年頃まで市内で実際に使われていたものです。上尾は比較的遅くまで摘田が行われていたことから、用具の残存度が高く、農業の基盤であった畑作の用具と共にまとまって収集されています。農具の内訳は、摘田用具309点と畑作用具212点の計521点です。

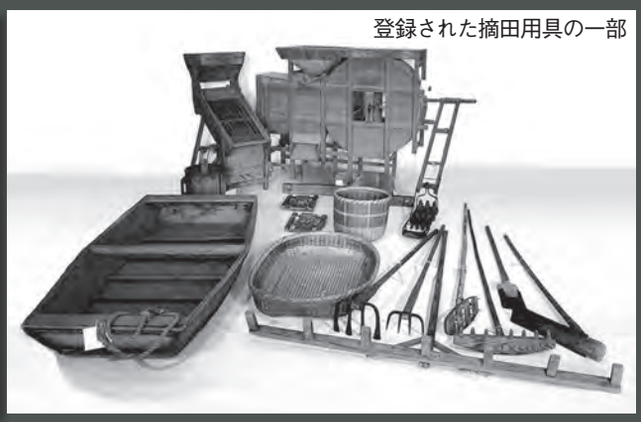
特に摘田用具は、田を起こす田作りから、種まき、除草、収穫まで体系的に農具一式がそろっているのは全国でも珍しく、農業の移り変わりを伝える貴重な資料です。

国登録有形民俗文化財は、全国で42件となり、関東地方で5件目、埼玉県で3件目の登録です。

コラム　「摘田」の名前の由来

「摘田」という名称がついた理由ははっきりとしていませんが、種籾を指で摘まんで田にまく作業(田摘み)からという説があります。

正徳六(1716)年の南村(大字南)の村明細帳『武蔵国足立郡南村指出シ』の中には、「田方ハ不残徒ミ田ニ而弥六稲作リ申候」とあります。これは、「田は全て摘田で、弥六という品種の稲を作っている」という意味です。江戸時代にも「つみた」という言葉が使われていたことがここからも読み取れます。



登録された摘田用具の一部